

河南省软科学研究计划项目（项目编号：122400450604）

中日语态中的 “责任认知”问题比较研究

李 红 张 瑜 段继绪◎著

責任認知

南开大学出版社

中日语态中的 “责任认知”问题比较研究

日本語と中国語のヴォイスにおける
“責任遡求”に関する研究

李红 张瑜 段继绪 著

南开大学出版社
天 津

图书在版编目(CIP)数据

中日语态中的“责任认知”问题比较研究 / 李红,
张瑜, 段继绪著. —天津: 南开大学出版社, 2013. 10
ISBN 978-7-310-04308-8

I. ①中… II. ①李…②张…③段… III. ①态(语
法)一对比研究—汉语、日语 IV. ①H364

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2013)第 223173 号

版权所有 侵权必究

南开大学出版社出版发行

出版人: 孙克强

地址: 天津市南开区卫津路 94 号 邮政编码: 300071

营销部电话: (022)23508339 23500755

营销部传真: (022)23508542 邮购部电话: (022)23502200

*

唐山天意印刷有限责任公司印刷

全国各地新华书店经销

*

2013 年 10 月第 1 版 2013 年 10 月第 1 次印刷

210×148 毫米 32 开本 11 印张 2 插页 283 千字

定价: 25.00 元

如遇图书印装质量问题, 请与本社营销部联系调换, 电话: (022)23507125

河南省软科学研究计划项目（项目编号：122400450604）

序

汉语母语者在学习日语的时候，感到较为困难的一项是被动表达和使役表达，这些都是和说话人视点相关的语态。由于日语语态中存在汉语所没有的独到之处，所以汉语母语者往往会在学习中遇到一些费解的问题。例如，日本被动句间接被动表达非常多，其主语多是人类等有感情的主体，并多表达消极意义，由于主语并不是直接受损或受害者，因此汉语母语者往往会感到难以理解。诸如此类，便要深入到对语言中语态构造的特征和本质等问题进行研究。

当今关于语态的研究，大致可以分为模型语态和非模型语态两种。对于模型语态的研究，尤其是通过中日双语模型语态对照研究，来探索语态构造特征的研究并不多见。概括来讲，在进行语言研究时，有形式主义和功能主义两种立场。形式主义以语法，即以统语论为中心，仅用语法内在的原理和原则来对语言学现象进行说明（高见健一，1995：4）。以往关于语态的研究多从形式主义的立场上入手，从统语上考察句子成分。然而，语言并不单单是由句子成分组合而成，还可以从语言表述中窥见人们的思考、价值观、世界观等。因此，要理解语言现象的本质，不能仅限于统语上的特征，还必须解释清楚人们在进行社会交往中该语言怎样使用、怎样传播等语言认知和语言应用方面的问题。

以河南理工大学李红副教授和中原工学院张瑜博士为首的科研团队，经过多年研究和资料积累，通过中日双语对照研究，分析两种语言中语态结构特征和本质的异同，从功能主义的角度考察语态中所体现的语言认知过程，完成了《中日语态中的“责任认知”问题比较研究》一书。本专著对模型语态，即自他动词对应、被动句、

使役句进行了系统而又深入的研究，对前人的研究做出了重要的补充和发展，取得了喜人的成果。

《中日语态中的“责任认知”问题比较研究》一书的出版，标志着该团队在日语语用学研究领域中迈出了宝贵的一步，跨上了一个新的台阶，我衷心地祝贺他们取得的成绩，并祝愿他们在今后的学术研究中勇于探索，奋力拼搏，在日语教育 and 研究事业中作出更大的成就，为中国的日语教育做出更大的贡献。

中国日语教学研究会常务理事
河南省高校日语教学研究会会长
洛阳外国语学院首席教授

王铁桥

2013 年春于河南郑州

前 言

在进行语言研究时，有形式主义和功能主义两种立场。形式主义以语法，即统语论为中心，仅用语法内在的原理和原则来对语言学现象进行说明（高见健一，1995：4）。以往关于语态的研究多从形式主义的立场上入手，从统语上考察句子成分。然而，语言并不只是由句子成分组成，从语言中还可以窥见人类的思考、价值观、世界观等。因此，要理解语言现象的本质，不能仅限于统语上的特征，而必须解释清楚在社会上该语言怎样使用、怎样传播等语言认知和语言应用方面的问题。本书将以统语上的特征为基础，从功能主义的角度着力考察语态中所体现的人类语言认知过程，通过中日双语对照研究，分析两种语言中语态的异同，并探索语态构造的特征和本质。

本著假定“责任认知”这一观点，将其作为产生语态表达的一个认知过程。由于我们假定这个观点存在于一切语言，所以在中日两种语言的语态模型中，我们也可以利用它来进行统一的记述。在对先行研究的考察中，本书已经解释了日语的语态和说话人的观点、看法息息相关这一事实。然而对照汉语的语态我们可以发现，日语中说话人的观点、看法的决定因素是不同的。因此，为了对中日两种语言进行对照研究，需要找出决定说话人观点、看法的共同工具。于是，本书便提出了“责任认知”这一观点，这正是本著的意义所在。

第1、2、3章阐述研究对象、立场和目的。本书的研究对象是模型语态表达，将以其在统语上的特征为基础，从功能主义的视角着眼于追索责任这一人类语言认知过程，从而阐明中日两种语言在语态表达上的异同。

第 4、5、6、7、8 章以模型语态表达在统语上的特征为基础,探索中日双语的自他对应、被动句、使役句中存在的责任认知这一认知过程的相似点和不同点。

第 9 章是以前几章的研究考察结果为基础,综合考察责任认知和中日双语语态表达的关系。两种语言中的时态表达所体现出的责任认知,从种类上来看是相同的。即“对事件责任人的追索”和“对存在于事件之外的第三者造成消极影响的责任人的追索”。而“对事件责任人的追索”又可以分为“追索责任”和“不追索责任”两种。但是,中日两种语言的语态表达中所体现出的责任追索是不尽相同的。例如,在两种语言的被动句中,说话人是否将责任人作为前景,共鸣感的关系是否受到限制等。

第 10 章为了验证第 9 章中提出的假设,对日语母语者和汉语母语者分别进行了调查分析。主要验证“将责任人作为前景的表达”“将责任人作为背景的表达”“不追索责任人的表达”“责任人的有感情性”等假设。不过,中日双语无意志他动词句中所出现的责任追索的不同之处,目前还没有得到验证。

第 11 章主要从第二语言教育中出现的语音、音韵以及句子构造等问题着手,指出语言使用方面不受重视的现实。如何在教育中对中日两种语言的语态中所体现出的责任认知的异同之处进行提示,将成为下一步的研究课题。

本著是河南理工大学和中原工学院日语科研团队共同努力、协作完成的结晶,第 1、2、3、4、6 章由李红(河南理工大学)负责撰写;第 5 章由段继绪(河南理工大学)负责撰写;第 7、8、9、10、11 章由张瑜(中原工学院)负责撰写。

此外,该专著的出版得到了南开大学出版社张彤老师的诸多帮助与鼎力支持,在此,谨表诚挚的谢意。

著者于 2013 年春

目 次

第一章 序論.....	1
第二章 先行研究について.....	4
2.1 日本語のヴォイスについての先行研究.....	5
2.2 日中両言語の対照についての先行研究.....	15
2.3 先行研究への概観.....	19
第三章 本書の立場.....	20
3.1 ヴォイスの範囲について.....	21
3.2 「責任遡求」について.....	29
第四章 自他動詞文.....	33
4.1 日本語の自他対応.....	34
4.2 中国語の自他対応.....	55
4.3 日中両言語における自他対応の対照.....	67
第五章 直接受身文.....	72
5.1 受身文の分類.....	73
5.2 日本語の直接受身文.....	84
5.3 中国語の直接受身文.....	127
5.4 日中両言語における直接受身文の対照.....	194
第六章 間接受身文.....	202
6.1 日本語の間接受身文.....	203
6.2 中国語の間接受身文.....	219
6.3 日中両言語における間接受身文の対照.....	228
第七章 持ち主の受身文.....	232
7.1 日本語の持ち主の受身文.....	232
7.2 中国語の持ち主の受身文.....	240
7.3 日中両言語における持ち主の受身文の対照.....	248

第八章 使役文	251
8.1 使役文の特徴.....	252
8.2 使役文の種類.....	254
8.3 日本語の使役文と責任遡求.....	261
8.4 中国語の使役文と責任遡求.....	266
8.5 日中両言語における使役文の対照.....	269
第九章 ヴォイスと責任遡求	274
9.1 日中両言語におけるヴォイス表現と責任遡求との関 わり.....	276
9.2 日中両言語のヴォイスにおける責任遡求の相違点...	277
9.3 責任遡求という考え方の意義.....	281
第十章 検証	283
10.1 調査方法.....	283
10.2 アンケートの回答.....	309
10.3 回答結果の分析.....	321
10.4 まとめ.....	329
第十一章 終章	330
参考文献	334

第一章 序 論

中国語母語話者が日本語を学習する際に、困難を伴う項目には、受身表現、使役表現などがあり、これらは視点が関わるヴォイス表現である。日本語のヴォイスには、中国語に見られない独特の側面があるため、中国語母語話者が学習するには、さらにさまざまな問題が生じる。

例えば、中国語の母語話者が日本語で話したり書いたりするときには、よく次のような誤用が生じる。^①

(1) a. *ドアが風に開けられた。

(门 被 风 吹 开 了。)

ドア ラレル 風 吹く 開ける ~た

b. ドアが風で開いた。

日本語では、他動詞の動作主になれるのは有情物(animate)しかないので、「風」のような名詞は動作主として働くことができない。一方、中国語では受身文の動作主として働く制限が日本語よりかなりルーズで、有情物も無情物(inanimate)も両方受身文に用いら

① *という記号は、その文が文法的に正しくない(非文法的である)ことを示す。

#という記号は、その文脈で求められている解釈では非文法的であるが、その以外の解釈では文法的であることを示す。

?その文は、文法的にやや不自然であることを示す。

??その文は、文法的に不自然であることを示す。

れるので、中国語の母語話者にはよく(1a)のような誤用が出てしまうことがある。

上述したように、(1)のような日中両言語の異同は、統語上から判明できる相違点である。しかし、統語上から、うまく説明できない場合もある。

- (2) 中国人の留学生がアルバイトをする場合、うっかり手が滑って、コップが割れてしまったときに、

留学生：#すみません、コップが割れてしまった。

マスター：割ってしまったんでしょう。

(2)が示しているように、留学生の発話とマスターの発話は文法上から見ると両方正しい。しかし、中国語を母語とする留学生の発話は、日本語の言語習慣からずれている。中国語母語話者が、日本語で話すときには、しばしば(2)のような誤用が出てしまう。このような誤用は、単に日中両言語の言語形式上から解釈できず、両言語の運用面上の違いにも起因すると考える。

言語研究を行う際に、大まかに言って、形式主義と機能主義という二つの立場がある。高見健一(1995:4)による「形式主義は、文法、つまり統語論を中心に据え、文法に内在する原理や原則のみによって言語事実を説明しようとする。機能主義は、言語使用の立場から言語事実を捉え、文法に外在的な要因にその説明を求めようとする。」とある。従来は、ヴォイスについての研究は、形式主義の立場から捉え、統語上から文要素を考察するものが多く見られる。しかし、言語というものは、ただの文要素の組み立てではなく、言語から人間の思考、価値観などといった世界の見方を垣間見ることができる。(1)と(2)が示しているように、言語現

象の本質を理解するには、統語上の特徴だけではなく、社会においてその言語をどのように使用しているのか、どのように伝達されるのかなどの言語運用面(認知プロセス)を解明しなければならないということが分かる。

現在までの研究によって、ヴォイスを原型的ヴォイスと非原型的ヴォイスという二つのグループに分けられるということが分かっている。本書では、原型的ヴォイスの表現だけを扱うことにする。これらの表現の統語上の特徴を基にして、機能主義の観点から、ヴォイス表現に表れた人間の認知プロセス(「責任遡求」という現象)に着目してヴォイスを考察し直してみたいと考える。

また、従来の第二言語教育においては、言語の音声、音韻や文構造を重点として扱うことが多いが、言語使用の側面をあまり重視していなかった。それが原因で、第二言語の学習者は、何年間勉強しても、母語の影響から抜け出せないことが多いのである。従って、第二言語の学習においても、その言語の文化に根ざした発想、または言語使用の側面についての学習も重要である。

第二章 先行研究について

本節では、ヴォイスというカテゴリーについて、従来の記述をたどってみる。

ヴォイス(態)は、普通動詞の文法カテゴリーのひとつであると考えられる。『言語学大辞典』(第六巻・術語編)によると、英語などの印欧語では、能動態(active voice)と受動態(passive voice、被動態ともいう)との動詞の態の対立として表されている。これは動詞の表す動作と、その動作を起こす者(動作主 agent)、および、その動作を受ける者(受動者 patient)との関わりあいを示すものである。動作主が主語となる場合はその動詞は能動態の形をとり、受動者が主語となる場合は、その動詞は受動態の形をとる。次の例の通りである。

- (1) a. He hit her. (彼は彼女を殴った。)
b. She was hit by him. (彼女は彼に殴られた。)

(1a)は動作主(he)が主語であるので、動詞(hit)が、能動形をとる。一方、(1b)は受動者(she)が主語となるので、その動詞(hit)が受動形をとる。この二つの文は同じ事実を表している、つまり、「彼が彼女を殴ったこと」を述べている。

以上より分かるように、印欧語の場合、ヴォイスというカテゴリーは態の対立によって、動詞と主語の関わりが異なるだけでなく、さらに、事実を見る立場も異なる。従って、active と passive

の対立をヴォイスとして捉えている。さらに、表されている事態の同一性がヴォイスの重要な性質とされる。このような捉え方を日本語に適用してみれば、もっとも狭義のヴォイスの捉え方(能動→直接受身のみに限定する)となる可能性がある。しかし、現代日本語のヴォイスをこれのみに限定する立場は日本語研究において少ない。「間接受身」(後述)を含めるのがほとんどである。さらに、「可能(～ラレル)・自発(～ラレル)・使役(～サセル)・対応自他動詞(例：あたたまる→あたためる)・恩恵の授受(例：あげる、やる)・シテアル」をヴォイスとしてみなすのも、少なくないである。

そこで、より詳細な記述を求めて、以下の節では、日中両言語におけるヴォイスに関する主な先行研究を紹介する。

2.1 日本語のヴォイスについての先行研究

日本語のヴォイスについての主な先行研究を、以下に挙げる。

仁田義雄(1981)

仁田義雄(1981)は、ヴォイスについて次のように解釈している。

「態」とは、動詞の形態的な範疇であるとともに、動詞の表す動作や作用の成立に関与する関与者のどれを中心にして、その動作や作用の実現を把握・表現するか、といったことにかかわるものである。動作や作用には、その実現に必要な関与者が決まっている。それが「格」である。態とは、そういった動作や作用の語彙的意味によって決まってくる関与者間の相互関係の図式を、何を中心として把握・表現するか、それがいかなるありかたを取る実現であるかといった、動作図式、作用図式の把握の仕方にかかわるものである。したがって、態は、格と、格を表示する格助詞にかかわる現象である。一般に、日本語の態としては、能動、受

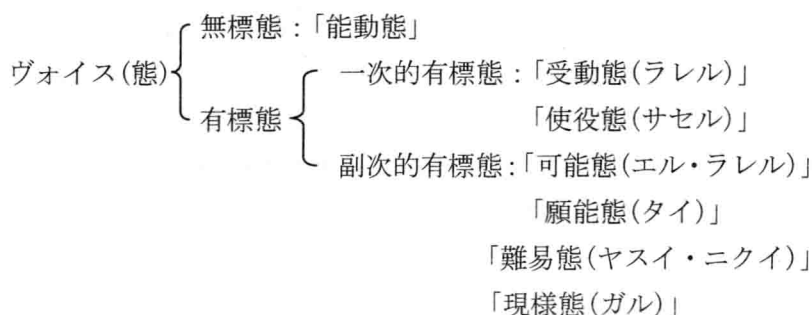
動、使役、可能、自発などの態が挙げられる。能動や受動や使役の態と可能や自発の態とは、基本的な性質を異にしている。敬讓や希望は態ではない。敬讓は待遇性の問題であり、希望は表現意図の問題である。狭義では、態は能動・受動・使役に限定する方がよいであろう。更に、態の体系の基本は、能動態と受動態の対立である。」

仁田義雄(1981:110)

仁田義雄(1981)は、ヴォイスを、関与者のどれを中心にして動作や作用の実現を把握・表現するかといったことに関わると説明している。また、仁田義雄(1981)は、広義と狭義から、日本語のヴォイスの範囲について規定している。

益岡隆志(1987)

益岡隆志(1987)においては、ヴォイスを「述語の生産的接辞添加にかかわる、単純述語・複雑述語の対立のあり方と、これらの述語が取る項の表現形式(格表現)に見られる対立(及び、それに付随する意味的対立)のあり方との関係の体系」と定義している。また、有標であるかどうかによって、ヴォイスの体系を次のようにまとめている。



(益岡隆志(1987:164))

野田尚史(1991)

野田尚史(1991)は、従来より広い範囲でヴォイスの対立を考えるために、ヴォイスを「文法的なヴォイス」「中間的なヴォイス」「語彙的なヴォイス」という三つの種類に分けている。

文法的なヴォイス：多数の動詞に自由につく「(R)ARE」「(S)ASE」という生産的な接辞によってヴォイスの対立を表すもの。「作る－作られる」「満足する－満足させる」のような対立。

中間的なヴォイス：語根は共有しながらも、限られた動詞にしか現れない「AS」「S」「AR」「R」などの形態によってヴォイスの対立を表すもの(いわゆる自動詞と他動詞の対立)。「壊す－壊れる」「預ける－預かる」のような対立。

語彙的なヴォイス：形態的には共通する部分がないが、意味的・構文的にヴォイスの対立を表すと考えられるもの。「殺す－死ぬ」「勝つ－負ける」のような対立。

(野田尚史(1991:212))

村木新次郎(1989)

村木新次郎(1989)は、「ヴォイスとは、文の意味構造と文を構成する要素のありかた一名詞の格形式や動詞の形態－との相関係である」と述べている。また、同じ事象を異なる視点から述べるか、ある事象に新たにくわわった関与者の視点から事象を述べるか、ということによって、ヴォイスを大きく「変形関係」と「派生関係」に分けている。